

主きる

大原富枝

文藝春秋新社

女は生きる

昭和三十六年十一月十日発行

定價 三〇〇圓

著者 大原 富枝

發行者 小野 詮造

發行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

萬一落丁亂丁の際は
お買求めの書店又は
發行所にてお取換致し
ます

本文 精興社
付物 大日本印刷
製本 矢島製本
製函 加藤製函

目次

一、	童女の不安	五
二、	結婚の意味	二五
三、	出征、戦死	四二
四、	泉のある道	六二
五、	再婚	一二三
六、	傷ある平和	一五二
七、	眞實を見る	一九四
八、	死と生と	二三四

女は生きる

—ある母の像—

一、童女の不安

四國山脈のたなわる山麓の中のある小さい山、小倉山の裾を吉野川が流れていた。四國三郎と呼ばれる大河も、このあたりでは幅百米ばかりの清らかな流れにすぎない。小倉山の裾で吉野川は小さい支流を一つ合せていた。汗見川というこの小川は吉野川とともに、小倉山を鳥のようにその裾を環流していた。

露はこの小倉山の裾の里に生れた。彼女は二人の娘を持った。久美はその末娘であった。

露は久美が十歳のとき死んだ。数え年で三十九歳であった。母の記憶は久美にとって淡くおぼつかなく、そして数少なかった。しかし彼女は母のことをたくさん知っていた。

日露戦争という、日本が過去に経験した國の運命を決定する困難な大戦争について、彼女が興味を持ったのはそれが母の生きた戦争であったからである。久美が知っているのは今度の第二次

世界大戰だけであつたが、祖母の梶は日清、日露の二大戦争に、今度の第二次世界大戰と三つの戦争を生きた。戦争はいつの場合も女たちから、愛する男たちを——夫や弟や戀人や友人を——奪つて終るものであつた。

梶は今度の大戰の終つた年、一九四五年の秋まで生きていた。しかし、久美が持っている母について知っていることの、全部が全部梶の話してくれたものだといふわけではなかつた。

梶は娘のことを孫である久美に話してきかせることは勿論あつたが、その幼時については話したがらなかつた。しかし久美は幼時の母について、まるでその面影をまざまざと見るように知っている。それらはすべて祖母以外の人から彼女が聴かされたものである。

落は懷手をして土藏の白壁にもたれていた。その日溜りの中で、晩秋の日射しが紫っぽく煙っているような下の家々を眺めていた。

家々は山の中腹に一軒一軒段々に建てられていて、どの家からもこの部落にはいつてくる、あるいは出てゆく人間の姿を眺めることができるようになっていた。

昔、壇ノ浦に滅んだ平家の殘黨が住みついたために、家々はそのように用心堅固に建てられているのだという傳説があつた。落はそんなことは知らない。彼女はやつと五歳^{いっ}でしかなかったか

ら——

路は近ごろ、ここに運ばれてきた。この伯母の家の作男の背に、紐で負われて運ばれてきたのである。

伯母の家は部落の一番上段にあつて、白壁の土蔵が麓からも見える一番裕福な家であることを、路は幼いなりに知っていた。繼母のお直が彼女にそういつてきかせたからである。

「大淵の伯母はんとこへいったらなんぼええやら知れんえ、伯母はんとこはええ衆やけんのう、ええもん買うてくれて、ええお衣裳着せてもらうてのう、こんな貧乏なお母はんのとこにいようもんかよのう？」

路には繼母の氣持は正確には掴めなかつたけれど、繼母が自分を伯母のところにやりたがつているということだけは漠然とわかつていた。路は身の上の變動を豫感して怯えていた。

父親が死んでからお直は毎日のように愚痴をこぼし、路に八つ当たりをするようになっている。いまの自分の境遇が極めて不安定なものであることを彼女は感じていた。

繼母はこんなこともいったからである。

「お路やんはなア、中島の伯母はんところへおいきや！ あそこも大淵の伯母はんところと同じにええ衆やけんなア、黒砂糖も食わしてくれるし、ええお衣裳も着せてくれるわなア……」

お直はこの土地の者ではなくて阿波から流れてきた女であつた。鼻筋のすうっと高く通つた大きな眼をした姿も美しい色白の目立つた女だ。この土地の女たちとは全く違ふねっとうとした阿

波の言葉で話した。

父親が生きていた時分、落の家には他國者よそもんと呼ばれる、異った言葉づかいをする男たちがごろごろしていた。

落の家は二人の伯母の嫁ぎ先の部落からは同じ程の距離にある、真中の里にあって、伯母たちの嫁ぎ先よりも大きな土藏や納屋、機屋、馬小舎などが、高い杉の防風垣の中に一郭の結構を持っていた。

しかし土藏の中には定紋つきの家財道具がはいっているだけで殆ど空っぽであった。

下の方が人ひとり樂に潛り抜けられるような大穴のあいた杉垣を距てた隣が、生母の梶の家だと落は知っていた。そこには祖母がいた。落は毎日その垣根の穴を抜けて祖母の家へ遊びにいった。

「お落やんぐには今日もよその小父ちゃんがごろごろしよるかよ、落の父さんにもまっこと困ったもんよのうし」

牛に飼ばをやったり、大根を干したり、粃を擗げたりする祖母にくつついて歩く落に、祖母はよくそういつて話した。

「米も麥も芋も、みんなよそ者に食わしてしまふがよ、いまにどうなるやら……」
落には父が非難されていることだけわかっていた。

しかし没落は生母の方がずっと早くその運命に見舞われていて、圍いの中の土藏はすでに賣られてしまい、その敷地はもう野菜畑になっていて、屋敷の結構は齒が抜けたように崩れていった。

落の母の梶の生家が没落したのは十數年も前のことで、梶がまだやっと八つくらいの頃であった。夜になると男たちが集まってきて聲を荒げて口論したり、たくさんの書物をつきつけられて、彼女の祖父が白髪の小さい髻たぶきを結った頭をじっとうつむけて、依怙地に黙り通す姿や、臺所で茶の支度をする祖母や母が眼頭を拭っているのを見るのが、梶の恐怖をそそった。

親戚の家の借金の請印うけいんをたくさん捺していたためにそうなったのだ、といつてきかされると、梶は、「請印」というものを祖母の昔噺にでくる山爺やまぢのように恐ろしいと思った。

彼女には、請印という人間の社會的な連帶の責任がこれほども一つの家族を不幸に陥れるということが納得できなかった。

勝氣な梶は、爐端に黙々と坐っている祖父の白髪はくはつの髻に、後からどんと體ごとぶつかってゆきながら、

「お祖父さんが悪いんじゃ、そんな恐ろしげなもん、捺さじゃアよかったのに……」
と叫んだ。

祖父に一番愛され、自分も一番彼を好きだった梶は、そのやさしい學問の好きな祖父が一家中

の者や親戚中の者たちに、怨まれたり責められたりしているのを、自身のことのように口惜しく心が痛んだのである。

「そうか、お梶、坊主の子（幼いという意味）のお前さえそういうがやの、わしが悪い、わしが悪い！」

祖父はそういつて梶の頭を撫でてくれた。

こうして梶の生家は田畑や山林の大部分をこのとき手放し、一舉に没落したが、屋敷の構えだけは、土藏を賣り拂った空地が菜園畑に變っただけで残っていた。

そんな騒ぎの中でも祖父は板垣退助の立志社の同志たちが村にやってくるこのこのその演説を聴きにでかけたりするので、一層債權者たちに責められたりする。しかし梶は祖父が好きであったし、立志社の壯士たちに何か身内がわくわくするような新鮮な魅力を感じた。

自分も男だったら、立志社の辯士になってゆくのに……と、彼女は機屋で機を織る祖母の傍で小裂れの類を縫い合せて座布団をつくる手傳いをしながらいった。

「何をいうぞよ、この子はまア、ああいうことはお前、白刃の下が平氣で潜れるようなお侍さんの子にしかできんことじゃ！」

祖母は梶が立志社の壯士に憧れているのを知ってたまげていった。

一八七八年、明治十一年ごろこの山深い土佐の村まで高まってきた自由民權の運動は、このと

き驚いた政府が布きはじめた彈壓法令で、梶のものごころづいた十四年ごろは、方々の演説場で警官と揉み合うような騒ぎが繰り返されていた。

「憲兵いう怖いもんができたげな！」

と人々はひそひそ話した。

梶は憲兵というものを見たこともないまま恐れ憎んでいた。彼女には權力というものに對しての憎しみが生れつき血の中にあつた。彼女は一刻も惜しまずせつせと仕事をする娘であつた。頭の中にはもやもやと雲のようにたくさんの事を考えているのが好きであつたが、そのために手を止めたり、だらだらと話込んだりすることは大嫌いであつた。

働きもので利發で、そして體も同い年の娘たちに比べてしっかりと發育している梶は、數え年十五のとき無理矢理に嫁入りさせられた。

相手は隣屋敷の孝太郎で、彼は頭は悪くはなかつたけれど怠け者であつた。怠け者だと梶は思つていた。彼が本當に怠け者だつたかどうかはわからない。もしかしたら彼は周圍に理解者を見出せないで短い生涯を終つた一人の男であつたかも知れない。

彼はとにかく百姓仕事が嫌いであつた。何を考へているのか、うつうつと目を暮していて、やつてくる人間を誰でも相手にした。動物が好きで犬や猫は勿論、兎やりすや鳥などを手あたり次第に飼つていた。

祖父や父親は梶を彼にやりたがって、

「孝太は無口で何を考えよるかわからんところがあるけれど、頭はええ男ぞ、財産はあるし、不足があるか……」

と梶を口説いた。

「ありゃア、大けな人物ぞ、このへんに置いちゃうのは惜しい奴じゃ」

梶は孝太郎が自分とはどこか全く肌の合わない男だということを漠然と感じていた。利發であったけれど働きのもので現実的な梶は、彼とその飼っている動物たちとの過度な愛情が理解できなかったし、きりきりしゅんと働かない男は好きになれなかった。

それでもとうとう彼女が嫁入りしていったのは、尊敬している祖父が賞める孝太郎を、つまらない男だと決めてしまう判断力が彼女になかったからであった。

いいかえると現実的にしか物を見ない自分の方が、もしかしたらあの漠然としている孝太郎よりもつまらない人間なのかも知れない、彼の方が自分の持たない何かを持っているのかも知れない、という漠然とした卑下の氣持が彼女にあったからであった。

女が男について迷う一つの地點で梶も決斷がつかなかったのだ。こうして梶は稚い花嫁になった。路は翌年、こういう父と母の間に生れた。そのときはじつはもう梶は實家に逃げ歸っていたのである。

彼女にはどうしても孝太郎の生活ぶりについてゆけなかった。一日中邸の中にいて、たくさん動物たちの世話をし、やってくる村の人々や、行商人や渡り職人と話をし、何かを書きつけてみたり、考えたりしている、仕事らしい仕事を何一つしようとしないう男といっしょに暮すのがどうしても嫌だと思った。

孝太郎が他人のために見境なく物を貸したりやったりするのが、梶には我慢ならなかった。彼のそういう暮しぶりにつけこんでは何程かの金や物を得しようとする、村は勿論、他國の人間までが出入するのは一層我慢がならなかった。

十六歳の梶は、

「孝太さんがどんな賢い、考えの深い人か知らんけど、あてはどうしても嫌いじゃもん、嫌いな男の傍にはおれんけんの！」

と父や母に宣言した。ともかく男と肌を接して暮してみても、稚いなりに彼女の発見した眞理であつた。

常人とは異つて何かを考えているような孝太郎を理解できないのは、自分が抽象的なものをわかる力がないせいかも知れない、という漠然とした卑下意識を持つ梶は、馬鹿でもいい、自分はその男は嫌いなのだ、と肚を据えたのである。

實家に歸つた梶は二年ほど経つて川一つ向うの丘の上にある家の長男のところへ再縁した。そ

うして、孝太郎の所には伊豫や讃岐や阿波の行商人や博打うちや渡り職人が、どうかすると五六人もごろごろ泊りこんでいるようになった。

渡り職人の中には、ふいごなど七ツ道具を天秤でかついだ鑄かけ屋や、庖丁とのり刷毛を紺木綿の風呂敷にくるくると巻いて抱えた經師屋もいるし、篆刻師や陰陽師もいた。

彼等はみんな常人と時間の使い方において異っていた。孝太郎は彼等と同じように時間を使うことに苦痛を感じない男だった。彼は世間をひろく渡り歩く職人たちや博打うち、陰陽師たちが、そのゆく先々で出會ったさまざまな體驗をきくのが愉しみであった。

自分には生きられない生涯を、彼等の口を通じて（ときにはでたらめも混っているにしても）生きる愉しみである。彼はみんなに幾日か飯を食わせ泊らせて旅立たせた。渡り職人たちの仲間にはその仲間だけの社會があるらしく、聞き傳えてはその仲間たちが次々にやってきた。

或者者はここで病氣になって長いこと療養して、旅立つときには路錢を貰っていたり、中にはここで行き倒れてしまい、彼の家の墓地に葬られた渡り職人も何人かあった。

四五頭の馬をはじめたくさんの動物たちの飼料と、いつでも五六人はごろごろしている旅の居候の食糧で、孝太郎の家はだんだん没落していったふうであった。

結局彼は何もしないで、何を考えていたのか、何をするつもりだったのか、それとも何もしないで無爲をこそ人生の目的としたのか、誰にも理解されないままで、理解されようと努めない